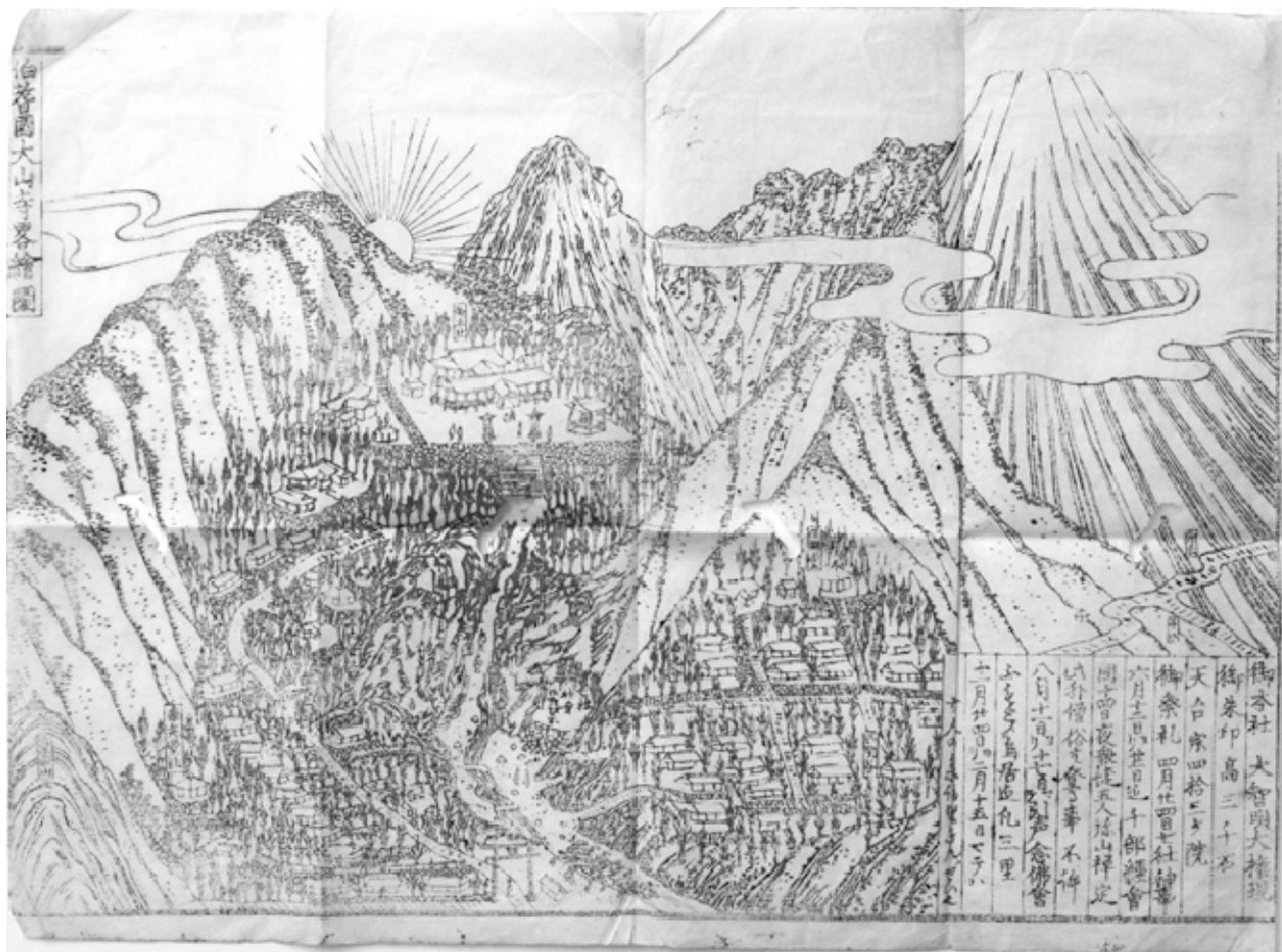


第 39 回日本山岳修験学会 大山学術大会

公開講座・研究発表要旨集



伯耆国大山寺略図（鳥取県立博物館蔵）

日時 平成30年（2018）10月20日（土）～22日（月）

会場 ホテル大山（本館）会議室（鳥取県西伯郡大山町大山36-2）

主催 日本山岳修験学会・同第39回大山学術大会実行委員会

後援 大山町教育委員会・三朝町教育委員会・鳥取県教育委員会

公益財団法人 とっとりコンベンションビューロー

協力 大神山神社（奥宮）角磐山大山寺・一般社団法人 大山観光局

米子市教育委員会

目次

ごあいさつ	1
-------	---

公開講座

(1) 基調講演『大山寺縁起』の語るもの	2
長谷部 八朗 (日本山岳修験学会副会長・駒澤大学学長)	
(2) 調査報告	
テーマ1 国指定史跡「大山寺旧境内」から見えてきたこと	4
西尾 秀道 (大山町教育委員会事務局 社会教育課長)	
テーマ2 三徳山調査10年のあゆみ	6
柚垣 大作 (三朝町教育委員会事務局 社会教育課副主幹)	
(3) 講演2「霊場・大山寺を考える」	8
山本 義孝 (日本山岳修験学会理事・静岡県袋井市歴史文化館長)	

研究発表

1 徐福と役行者および道教と修験道の関係について (池上 正治)	10
2 相模の一山寺院と『風土記稿』地誌調書上—大山寺と光勝寺— (城川 隆生)	11
3 近世都市部の神社と修験考・事始 (由谷 裕哉)	12
4 肥前国峰入峰における行所の様相—現地踏査の成果から— (岡寺 良)	13
5 下野岩舩山高勝寺真名縁起と檀那院胤海 (林 京子)	14
6 「伯州大山略絵図」を読む (岩鼻 通明)	15
7 荒神神楽「大山能」について (中野 秋鹿)	16
8 修験の竜樹菩薩信仰について—箕面の役行者伝承を中心に— (簗 元晶)	17
9 立山開山縁起の伝播—隠岐『高田大明神縁起』にみえる立山縁起— (加藤 基樹)	18
10 近世秋葉信仰の展開—『樞寺縁起』を中心として— (武井 慎悟)	19
11 鳥取からの小豆島巡拝—大山北麓地域を中心に— (小林 奈央子)	20
12 霊場恐山における参道空間の変容 (大道 晴香)	21
13 中世修験道の地域的な展開を巡って—戸隠山の事例— (カーター・ケイレブ)	22
14 山林・山岳・山の寺—遺構論の立場から見た用語定義について— (藤岡 英礼)	23
15 豪圓の寺院再興と近世大山寺の成立 (山本 隆一朗)	24
16 比叡山における豪圓の活躍—曼殊院文書の紹介— (中川 仁喜)	25
17 本山派の霞状 (時枝 務)	26

大会要領	27
------	----

ごあいさつ

鳥取県の誇る秀峰・大山は、中国地方の最高峰(剣ヶ峰 1,729m)であり、円錐形の美しい山容は伯耆富士とも称されます。

大山は、出雲の神が国引きの時に杭にした山とされ、『出雲国風土記』には「伯耆国なる大神岳(火神岳とも)」として登場します。約 1300 前の養老年間には、玉造の獵師・依道が殺生を悔やんで、弓を折り矢を捨てて地蔵菩薩を祀って寺を開いたという伝承があり、平安時代以降は祭神である大智明権現(地蔵菩薩)の信仰で全国に名をはせました。後には牛馬守護の信仰も加わり、盛大な牛馬市も開かれていました。

そして大山寺中興の祖と呼ばれる豪圓僧正が確立した寺領 3,000 石を背景に、江戸時代を通じて西日本有数の山岳信仰の霊場でありましたが、明治維新以降、神仏分離政策の影響で衰退しました。他方、近代化の中では、その豊かな自然に注目され、昭和 11 年に国立公園に指定されています。

大山の歴史の中には、幾多の災害や戦禍もありましたが、それらをくぐり抜けて今に伝わる貴重な文化財・歴史資料が存在しており、現在「大山寺旧境内」として国史跡に指定、「地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市」として日本遺産に認定されています。

この度、伯耆国「大山開山 1300 祭年祭」の一環として日本山岳修験学会第 39 回大山学術大会を開催します。当学会が鳥取県で開催されるのは、平成 18 年の三徳山(三朝町)大会以来、2 度目です。全国から集う研究者たちによって、大山をはじめとする山陰地方の山岳信仰の歴史や特色が解明される機会となると幸いです。

最後になりましたが、本学会が「大山さん」の御加護をいただいて 3 日間の日程が好天に恵まれ、無事に行われますことをお祈り申し上げてごあいさつとさせていただきます。

平成 30 年 10 月 20 日

第 39 回日本山岳修験学会大山学術大会実行委員会

『大山寺縁起』の語るもの

日本山岳修験学会副会長

駒澤大学学長 長谷部 八朗

1 『大山寺縁起』について

『大山寺縁起』（佐々木一雄編、稲葉書房、1971）の刊行。

『大山寺縁起』（巻上〈1～22〉、巻下〈23～43〉。洞明院蔵）と『大山寺縁起絵巻』（現存する絵と詞書をまとめたもの）を収録。

※『大山寺縁起絵巻』…奥書に応永5年（1398）とある。大正7年に国宝指定。昭和3年に焼失。

詞書は、『続群書類従』と東大史料編纂所の写本が残されている。但、両者の間には順序の違いがみられる。絵の一部（模写）は、東京国立博物館と東大史料編纂所に所蔵されている。また、大山寺理観院にも詞書の写本が伝えられており、上の刊本は、理観院本を底本として編集されている。

2 『大山寺縁起』の歴史的位置づけ

(1) 佐々木一雄氏の見解

『大山寺縁起絵巻』の奥書には「応永五年（1398）八月一日書之」とある。その種本となったと思われる『大山寺縁起』の作成年代は記載されていないが、鎌倉時代の筆影を残すとみられる。したがって、絵巻作成に先立ち、伝承の説話を整理編集する必要から編述された底本がこの『大山寺縁起』であろうと推論している。

(2) 『大山町誌』（1980）の見解

内容の最下限は応長元年（1311）。建治元年（1275）の文に、「今の世の事ならば人皆知るなり」とある。これらをもとに、14世紀初め頃の作とする。『大山寺縁起』と『大山寺縁起絵巻』の間に相当の年代的な隔りがあることになる。

『撰集抄』に『大山寺縁起』と同種の開基説話がある。→『大山寺縁起』の成立は『撰集抄』より一世紀ほど後と推定される。『撰集抄』の作者（西行に仮託されるが疑わしい）が出典なしに創作したとは考えられない。したがって、『大山寺縁起』作成以前に『古大山寺縁起』のようなものが存在したのではないかとしている。

※内容の最下限は正和5年（1316）が正しい。

(3) 私見

『大山寺縁起』中の「…画にこれ在り」（第1段）、「絵にこれ在り」（第2段）→「古縁起絵巻」の存在を示すのではないかと。

『撰集抄』と『大山寺縁起』の開基説話の比較→一見したところ「同種の説話」だが両者には決定的な相違がみられる。この事実は、『大山寺縁起』の作成目的の一つに、既存の縁起の補訂があったことを示唆しているのではないかと。（第7段）

※「登攬尼」への着目→「登攬尼」をめぐる伝承説話は各地の霊山に存在するが、『大山寺縁起』の開基説話の場合は、他山にみられない特異な構成といえる。

3 『大山寺縁起』の主要な特徴

(1) 「智明(地蔵)権現の靈験」+「法華経の効験」という二重の靈験譚が、基本的なモチーフを成している。（第1、第2段他）

両者が単独で語られる場合と複合的に語られる場合がみられる。

「如法経」についての言説→中覚院（中門院）の意味づけ、後の「弥山禅定」の意味づけの根拠。

靈驗の語りの二重構造→他の名だたる神仏に「智明権現」の靈驗あらたかさを語らせる。
(第9段他)

「智明権現」の威光を増幅する効果。

(2) 客観的な眼で、一山の状況を記述している。

三院(中門院・南光院・西明院)間の確執、山内僧侶の頹廢、官人との摩擦など。(第14、第20、第21段他)

(3) 文献の引用や史料的に裏付けられた記述が目につく。

「大山史の正史料もまた巻中随所に秘められていることに注意を払わなければならない」
(佐々木)

「『大山寺縁起』は単なる俗書として片付けられぬ史料性格を帯びている」(『大山町誌』)

『中右記』嘉保元年(1094)3月8日条

「今日伯耆大山大衆三百人許、参院陣云々、依憂申座主也」

上史料は、『大山寺縁起』(第15段)の内容をほぼ裏付けている。

(4) 衆生教化の典拠、由緒ある歴史を説くための史料、山内僧侶に対する訓戒・啓発などの性格を併せ持つ。

修辞の利いた表現が随所にみられる。→作者は博識に加え、優れた文章力の持ち主と考えられる。この文芸性は、説経・唱道的なねらいを物語るものか。

「故に此の地をふむ者は行なくして大覚の位にのぼり、此の流れを汲む者は智なけれども煩惱のあかをすすぐ。我が山に入る物は生死の家を出で、吾が山を出づる者は流転の里に入ると宣べ給ふ」(第2段)



(2) 多宝塔が沈んだのち、
地藏・観音・文殊が出現する

(1) 密勝・仏覚の二仙人の前に山頂の池から多宝塔が現れる
大山寺縁起 上巻(模本) [部分] 東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives



(4) 仏覚・智勝仙人が納経すると、
両部大日と金色の不動明王が現れる

(3) 智勝仙人が「法華經」を説くと
普賢菩薩が現れる



(6) 南光院・西明院の起立

(5) 出雲国玉造の眞師・依道の発心 大山寺縁起 下巻(模本) [部分]
東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives

はせべ・はちろう 昭和25年、埼玉県生まれ。

慶應義塾大学商学部卒業、駒澤大学大学院人文科学研究科博士課程単位
取得満期退学。

専門は宗教学・民俗学。現在、駒澤大学学長。

近著に『「講」研究の可能性Ⅲ』(編著、平成28年、慶友社)がある。

国指定史跡「大山寺旧境内」から見えてきたこと

大山町教育委員会事務局社会福祉教育課課長 西尾 秀道

１．はじめに

～ 大山寺旧境内 ～

２．大山寺の概要

- (1) 大山信仰のあけぼの
- (2) 大山寺史 …年表から
- (3) 大山寺三院の主要な堂社

３．大山寺に係る調査成果の概要

(１) 総合調査

- ① 古文書・位牌調査 ② 仏像・仏画調査
- ③ 建造物調査 ④ 踏査・発掘調査
- ⑤ 墓地石塔調査

(２) 踏査による諸堂社跡及び僧坊跡の分布把握

- ① 堂社跡・僧坊跡の数 ② 堂社跡・僧坊跡の配置 ③ 寂靜山地区の特徴
- ④ 三所権現の境内と参道通路 ⑤ 僧坊跡の規模 ⑥ 中世石塔・近世石塔墓地

(３) 古文書調査

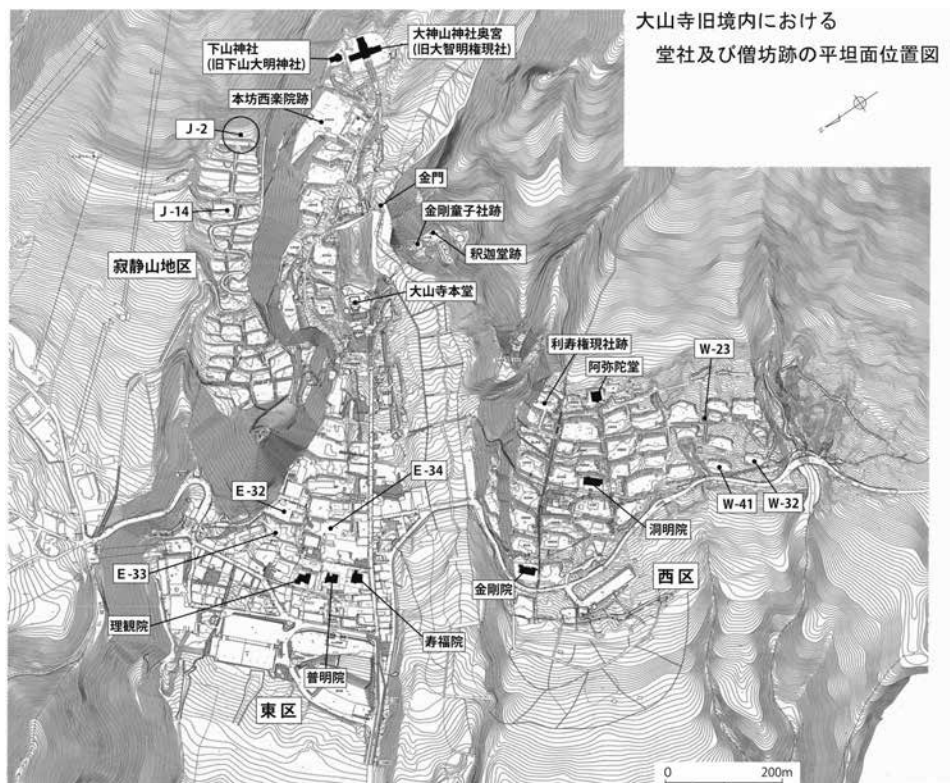
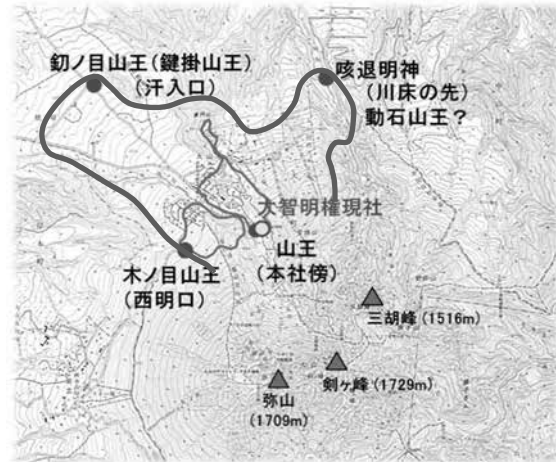
『一乗院 円流院 安養院 諸国檀那村控』明治 15(1882)年

(４) 発掘調査の概要

- ① J-14 区 ② E-32 区 ③ E-34 区 ④ E-33 区 ⑤ その他

(５) 発掘調査及び踏査の成果から得られた知見

４．おわりに



大山寺略年表

西暦	和暦	内 容
683	天武 12	役優婆塞が三胡の岩屋、馬頭の岩窟で修業、金剛蔵王などを拝す（縁起）
718	養老 2	出雲玉作の獺師依道が発心して修行した後、金蓮上人となって大山を開く（寺伝）
764～770		称徳天皇御宇、俊方、訖宣により堂を社になして大智明神という（撰集抄）
937	承平 7	五社の神輿を連ねた権現神幸が行われ、西国一の盛観（縁起）
954	天曆 8	大智明菩薩号を賜る。応和 3（963）年に大智明権現を称す。
1039	長曆 3	関白道長の祈願により、禅侶 300 人で大般若經一部六百巻を転読（縁起）
11C 中頃		大駿者・真言師次郎の修行地に「 伯耆大山 」も挙がる（新猿楽記）
1081	永保元	南光院末寺の朝妻寺 の鐘をめくり、中門院と南光・西明院が合戦
1094	寛治 8	地藏会頭役をめくり三院合戦。和議上裁を仰ぐため衆徒三百余人上洛（縁起）
11C 後半～12C 前半		四方の靈驗所の一つに「 伯耆の大山 」が見える（梁塵秘抄）
〃		平正盛が、源義頼討伐祈願（康和元）の御恩報に三経及び田地を寄進。
1100	康和 2	梵鐘鑄造をめくり、南光院と中門院が合戦
1102	康和 4	国司左京進盛光、蓮華会を行う。代々の国司が受け継ぎ百年続く（縁起）
1115	永久 3	撞鐘をめくり、南光院と中門院の衆徒が争う（縁起）
12 世紀初頭		愛宕山僧蔵算、大山での修行を終え、京都で地藏信仰を広める（今昔物語）
1131	天承元	大仏師良圓、阿弥陀如来坐像三尊を制作（胎内銘） 国重要文化財
1167	仁安 2	建仁寺の栄西、伯耆大山で基好上人より両部灌頂を受ける（元亨釈書）
1168	仁安 3	大嘗会公物の賦課をめくり、中門院・西明院と南光院の衆徒が争う（縁起）
1172	承安 2	一山議定。紀成盛、金銅製地藏尊・鉄製厨子奉納（銘板） 国重要文化財
1186	文治 2	元東大寺僧・理心、西明院で写経（伯耆町善福寺所蔵經典奥書）
1193	建久 4	佐々木高綱、等身地藏を安置し、末吉・稲光・稲吉の内各一町歩を寄進
1221	承久 3	南光院別当慶好、幕府から祈禱を承り、恩賞に蚊屋荘を賜う（縁起）
1234	天福 2	『僧正慈源所領注文写』に「伯耆国大山寺」と見える（大山寺市の初見）
1285	弘安 8	和泉国住人智月房禅慶、不動明王坐像を制作 …… 町指定文化財
1288	正応元	大雨により中門院の房舎数十棟流出（縁起）
1330	元徳 2	備中修験者と争い憤死した渡辺源五照政の霊を葬る（縁起） 下山善神創建
1333	元弘 3	別当信濃坊源盛、大山衆徒 24 人を率い船上山に馳せ参じる（異本伯耆巻）
1351	正平 6	山名時氏、西明院衆徒に久古御牧を寄進（寺文書）
1398	応永 5	前豊前入道了阿、『大山縁起絵巻』（全十巻）を完成
1403	応永 10	幕府、守護山名氏之に久古御牧地頭を 大山寺 西明院雑掌に渡付さず（寺文書）
1430～	永享 2～	この頃、比叡山延暦寺東塔の無動寺領末寺に「伯州大山寺」とみえる。
1440	永享 12	山名持豊、大山寺西明院衆徒に久古御牧一円及び渡村を安堵（寺文書）
1458	長祿 2	幕府、大山寺領久古村を安堵（寺文書）
1529	享祿 2	洪水により大山寺常行堂が流出（棟札写）
1552	天文 21	新地に古常行堂を曳き改め（天文 6）、再建成就（棟札） 重要文化財 阿弥陀堂
1555	弘治元	尼子晴久、天文 23 年焼失の本社・諸堂舎を再建（棟札写）
1566	永祿 9	吉川元春、尼子氏の富田城を落し大山寺に答礼。毛利氏が権現社再建（洞明院文書）
1582	天正 10	毛利氏、大山寺諸堂社修復・仏像造立、伯耆東三郡に寺領一千貫寄進（棟札）
1594	文祿 3	円智法印（豪円）、比叡山より帰山し一山を管理（諸事覚書）
1601	慶長 6	米子城に入った中村忠一、豪圓に帰依し三千石と境内等を寄付
1610	慶長 15	將軍秀忠、西楽院に寺領三千石を安堵
1655	明暦元	大山寺炎上、諸堂社焼失。万治 2（1659）年にも大火あり諸堂舎焼失
1668	寛文 8	西楽院主胤海、施主となって 大山寺諸堂社を再建
1670	寛文 10	大山騒動により 11 ヲ寺（院）が廃される（一山三院四十二坊体制となる）
1796	寛政 8	本社・本坊はじめ 30 余坊が焼失（大山寺由緒）
1805	文化 2	大智明権現本社と下山明神社が再建される（ 重要文化財として現存 ）
1829	文政 12	暴風雨により大被害があり再建に着手、天保元（1830）年に完成
1867	慶応 3	大山領三千石を差出す。翌年、鳥取藩預かりとなる
1875	明治 8	大山寺号廃絶。大山権現社は国幣小社大神山神社奥宮と定められる。
1903	明治 36	大山寺号の復活が許され、新たな大山寺が興される。

にしお・ひでみち 昭和 42 年鳥取県生まれ。島根大学（考古学）卒業。
銀行員を経て役場入り後、文化財担当者として勤務。近年は大山寺旧境内の国史跡指
定、日本遺産認定などを担当。
現在、大山町教育委員会事務局 社会教育課長。

三徳山調査10年のあゆみ

三朝町教育委員会事務局社会教育課

副主幹 柚垣 大作

1 はじめに

(1)三徳山の位置と概要

(2)三徳山調査の前史

2 三徳山調査

平成 18 年（2006）	第 27 回日本山岳修験学会 三徳山（三朝町）学術大会		
平成 19 年（2007）	神倉地内遺構分布調査（神倉神社・冠岩・湯ほか）		
平成 23 年（2011）	神倉佛谷	堂屋敷	遺構：建物跡・土杭・集石 遺物：陶磁器 時代：近世以前
平成 24 年（2012）	美徳頭	鈴が岩	遺構：炉跡 遺物：木炭 時代：近世
平成 26 年（2014）	神倉後口山	通称「湯」	地形測量
平成 27 年（2015）	美徳頭	三鈷岩屋	窟×4 複数の石鉢を確認
		通称「山王」	集石を確認
	九曜頭	通称「大門」	結界として再検討
	神倉後口山	通称「湯」	遺構検出・三次元計測
平成 28 年（2016）	神倉後口山	通称「湯」	遺構検出（発掘は地震のため中止）
平成 29 年（2017）	美徳頭	蔵王権現岩屋	石鉢・岩棚を確認
		勝手権現岩屋	石鉢・炉跡を確認
	神倉後口山	通称「湯」	三次元計測（第2次） 集石断ち割り トレンチ調査
平成 30 年（2018）	神倉後口山	通称「湯」	周辺地形測量 三次元計測（第3次） トレンチ調査



神倉佛谷 堂屋敷



鈴が岩



山王



大門



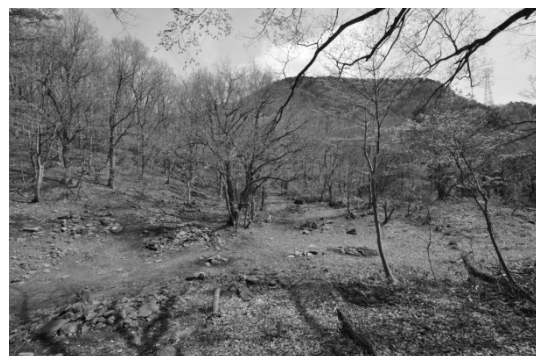
三鈷岩屋



蔵王権現岩屋



勝手権現岩屋



神倉「湯」

ゆがき・だいさく 昭和 54 年鳥取県生まれ。
鳥取大学教育学部卒業。専門は歴史学。現在、三朝町教育委員会社会教育課副主幹。著書に『名勝及び史跡三徳山発掘調査報告書(平成 18 年、三朝町教育委員会)等がある。

霊場・大山を考える

日本山岳修験学会理事
袋井市歴史文化館長 山本 義孝

はじめに

霊場「大山」とは、標高 1709m の弥山山頂から山麓にまで及ぶ広大な聖域空間を指している。このうち山寺としての「大山寺」は山頂部北側斜面、標高 950～800m の範囲に中門院谷、南光院谷、西明院谷という三院に展開した谷組織(房中)の総称で、これに関しては現地調査が進展し、旧状が少しずつ明らかとなってきたが、背後に展開する広大な山中についての情報は皆無に近い。ここでは山岳霊場としての大山を、出雲国と伯耆国の山岳信仰中に位置づけることで検討してみたい。

1 出雲国の概観

出雲における山岳信仰は蔵王権現を中心とする山の修験と、熊野三所(十二所)権現を中心とする海の修験とが連動した構造をなしているのが特徴で、日本海に面した東西 65 km に延びる島根半島で顕著にみることができる。半島の山系は西から大きく3つの山塊から成り立ち、このうち西側出雲市の北山山系は標高 500m を超える山並が連なり廻峰行を行うには格好の地形的要因をなし、山岳修行の拠点として浮浪山鰐淵寺が営まれている。

中世期には多くの津・湊が営まれ、北部九州や北陸に繋がる海上交通の要衝として中国・朝鮮半島との交流も盛んであった。このうち大山との関りが濃厚なのが半島東端の美保関から地蔵埼にかけての地域で、大山開山の金蓮上人は、もと出雲玉造の猟師で地蔵埼まで金狼を追い詰めるが海中に逃げられてしまい、再び見出したのが大山山中であった。島根半島東端の岬は大山遥拝のポイントであった。

2 伯耆国の概観

伯耆においては三徳(美德)山の実態解明を目的とした現地調査を平成 18 年の山岳修験学会三徳山大会を契機に継続している。一山は三徳山頂部を挟み、神領内を南側の小鹿川流域の「南座」、北側の三徳川流域の「北座」に分け、両座の衆徒が奥之院蔵王堂に奉仕する状況が明確になるとともに、山中からは岩屋や拝所、修法地点をはじめ山中修行に関わる多様な遺跡が顔を出しつつある。山内での房院の形成は現在の三佛寺塔頭付近の極一部に限られ、大山や船上山のような谷組織(房中)を形成しないのが特徴で、伯耆国における国峰として、峰中修行や参籠拠点としての性格が強い。

3 大山をめぐる山岳修行

大山における山岳修行は、近世期には年一度の山頂部への納経を行う行為だけに退転したが、中世期の「弥山禅定」を伺う資料として「大山寺縁起」(大山寺洞明院蔵)、「大山雑記」(1846 年嗒然が編纂)の記載内容を読み解き、「大山寺縁起絵巻」(東京国立博物館・東大史料編纂所等蔵)の画像を、実際の山中尾根稜線を中心に景観と照合し、地形を読み解くことにより復元することができる。その視点で霊場大山への評価を再構築し、大山寺一山組織の在り方を検討することで、中世期の霊場、大山が見えてくるのではないだろうか。

西にかへりては大悲観音を
馬頭巖嶺に奉見凡大峯葛
木其儀たかふことなく瑜伽護摩
の行儀其旨は一也策を採水を
酌只釈迦菩薩の昔の行に
なぞらへ菓を拾薪を取偏に阿
私仙人の古にことならずされば山林
斗數の行者絶す修驗高德有也



▲馬頭巖嶺

大山寺縁起 下巻(模本)

[部分]東京国立博物館蔵 image:TNM Image Archives



▲三鈷峰

▲役優婆塞 前鬼 後鬼

天武十二年に役優婆塞米
て嶺峯によちのぼり
入於深山思惟仏道の行を
立三祇百劫の修行年を
重給しに東に行きては金剛蔵
王を三胡の岩屋に奉拝也



▲三胡(鈷)の岩屋(蔵王権現)

▲阿弥陀川

▲宝珠尾根

やまもと・よしたか 昭和 36 年、京都府生まれ。

別府大学文学部卒業、放送大学大学院文化科学研究科修了後、高野山大学院密教学
専攻で故日野西眞定氏に師事。専門は宗教史・考古学。現在、静岡県袋井市歴史文化
館・郷土資料館長。

近著に『彦彦山—信仰の展開と転換—九州山岳霊場遺跡研究会資料』(共著、平成 29
年)がある。

徐福と役行者および道教と修験道の関係について

池上 正治

はじめに

徐福は道教のプロ・道士であり、紀元前 3 世紀の中国に実在した。役行者は、7 世紀の飛鳥期に実在し、修験道の開祖となった。徐福と役行者の人となりを確認し、道教と修験道をいくつかの要素から比較し、最後に両者の目指した方向を指摘したい。

徐福と道教

紀元前 3 世紀、秦代に実在した道士・徐福は、始皇帝の命を受けて、不老の靈薬を探すため、東海に船出したとされる。その伝承は、中国・韓国・日本の東アジアの 3 国に広がる。

道教は、中国古来の、土着の、宗教・思想。老子を始祖、玉皇を最上位神とし、土俗の諸神をふくみ、現世の「有求必応」から、霊が帰する泰山の信仰まで、広く包括。仏教の中国伝来（紀元前後、漢代）に刺激されて、急速に理論武装し、教壇化した道教は、思想的には、孔子の儒教と対極にある。

役行者と修験道

7 世紀に実在、『続日本紀』に「小角、葛城の山に住み、呪術をもって称められる・伊豆島に流される」とある。やがて都に召還され、701 年（大宝 1）昇天したという。

日本古来の山岳信仰が、神道や、外来の仏教、道教の影響をうけ、平安時代の末期に宗教の形態をとり、鎌倉時代に確立、江戸期に広まった。山で修行をし、それによって得られた験力^{げんりき}で里の民の求めに応える。主に祭る神は、役行者が感得した蔵王権現で、特定の経典はない。

道教と修験道を比較すれば

- 不老長生 不老不死の途が、どうして無いはずがあろうか（『抱朴子』巻 2 論仙）
役行者が昇天した天上ヶ岳（大阪・箕面）
- 空中飛翔 最上の道士は肉体のまま虚空に登る。これを天仙という（『抱朴子』巻 2 論仙）
役の優婆塞・不思議な力を得て・天に飛ぶ（『日本霊異記』）
- 医薬治病 薬学の神として徐福を祭る（和歌山・新宮）
役小角の生地とされる吉祥草寺の伝承（奈良・御所）

背中を押してくれた一文

上述の内容比較はやや躊躇したが、「両教（仏教と道教）を摂取し、之を文るに国民的信仰を以てしたるものは、本邦の修験道即山伏なり」（小柳司気太）の一文に導かれた。

おわりに

不死薬の探求を目指した徐福は、道士としての知識と技術を駆使し、海のかなたに安住の地を求めた。峰のなかに修行の場を求めた役行者は、里の民の求めに応じ、その験力を行使した。両者は 21 世紀の今日まで生命力をもち、その歴史は興味深い。

（いけがみ・しょうじ 作家・翻訳家）

相模の一山寺院と『風土記稿』地誌調書上 —大山寺と光勝寺—

城川 隆生

発表者は、昨年、江戸幕府地誌調所に地誌編纂資料として提出されていた、八菅山と大山の書上を目にする機会を得た。その解説作業の中で、近世を語る際に度々引用される『新編相模国風土記稿』の記述が必ずしも当該宗教者集団の現状と意識を反映していないことに気付いた。そこで、山岳霊場についての様々な言説の発生装置としてこの公的編纂テキストを捉える必要もあるという視点から、今回は、地誌調書上と風土記稿（内閣文庫本）の内容の階層構成の相違に注目し比較分析を試みる。

八菅山光勝寺は、文政9年(1826)に『相州八菅山書上』を提出している。内容は96頁である。項目を大・中・小の階層で考えると、大項目は、山号・寺号・本寺・開闢・開基・鎮守御社七社権現・伽藍草創・本社御霊屋并諸堂以下35項目で一山の全貌を報告している。特に分量が多いのは国峯修行と坊中本尊并所持什物である。対する風土記稿大項目「八菅村」では、八菅山にかかわる中項目は、八菅山・七社権現社・八菅山新田で、七社権現社の下層の小項目に山内の諸堂が列挙され、その一つとして別当光勝寺を上げ本堂と山内の運営組織及び国峰修行を説明している。地誌調所による一山の意図的捉え直しである。

『大山地誌調書上』（天保6年・1835）は大正期の写本が現存し、20の書上からなる大部である。提出者はそれぞれ、大山町、各滝の滝守、各寺院、修験、大山寺、別当八大坊である。大山寺として提出された分は添付資料を含んで96頁。別当八大坊として提出された分が66頁である。大山寺の書上の大項目は、御朱印地所・開闢・中興・本尊・二月廿八日神事・氏子・本堂并諸伽藍地所など、以下は石尊社を含み各建造物毎に報告されている。八大坊の書上は境内御朱印地・碩学領・寺領・御禁制・御條目・開山・中興・開基・惣地坪・大日堂、以下はやはり各種建造物と配下の院坊毎である。対する風土記稿の大項目は、まず大山寺ではなく「大山」。そして中項目では、不動堂の項で不動堂境内が大山寺とされ、石尊社も中項目で山頂エリアと二重堂を説明し、なぜか前不動堂以下、楼門・二王門・別当八大坊が中項目という矛盾をはらむ構成である。一山組織がテキスト上解体されているのはここでも明らかである。

（きがわ・たかお）

近世都市部の神社と修験考・事始

由谷 裕哉

報告者は、近世（江戸時代）における修験のあり方を里修験・里山伏に一元化して捉え、かつ彼らイコール村の呪術的な宗教者だと見なす通説に、疑念を抱いている。本年上梓した拙著『近世修験の宗教民俗学的研究』（岩田書院）でも、報告者は山岳－里、移動－定着という二項それぞれの後の項に近世修験を位置づける通説に、疑義を呈している。

本報告では都市部という枠組で、とくに神社と近世修験との関わりを考察したい。事例は報告者がかつて、その旧市街地に立地する神社の神仏分離を取り上げたことのある金沢、および（報告時までどれほどデータを集められるか分からないが）その市街地神社を調べ始めた小松、を考えている。

金沢および小松市街地の神社に関して特徴的だと考えられるのは、遷座した伝承が多いことに加え、その行政区画と神社との照応が近郊の村落部と著しく異なることであろう。明治9年（1876）の『皇国地誌』によれば、金沢区は535町を数えているのに対し、神社数は30社および招魂社とされる。小松町は、28町に対して10社が書き上げられている。

対して村落部の例として、石川郡富樫郷54村の内、昭和10年（1935）に金沢市に編入された富樫村10大字の前身に当たる10村を見ると、神社は12社が記載されている。また昭和15年に小松市が成立した際に含まれた能美郡苗代村の場合、14村に対して28社が書き上げられており、日露戦後の神社合祀でその数が13社まで減らされることになった。以上2例から類推すれば、これら村落部の神社は、自然村（大字）的な秩序の一端と関わっていたとも推察される。

そのような村落部の神社とは対照的な、市街地神社と修験との関わりであるが、旧稿「神仏分離後に語られた藩政期の神社と社僧―旧金沢市域の例から―」（『宗教研究』353号、2007年）で、金沢の旧市街地神社に関して『皇国地誌』で言及される30社のうち、吉田家より認定された社家以外の宗教者が、近世に祭祀を担当していた18社を検討した。そのうち、近世に修験が社僧別当的な役割を果たしていたのは、8社であった。

本報告では、この旧稿以降の検討を「事始」として行うことができれば、と考えている。

（よしたに・ひろや 小松短期大学教授）

肥前国峰入峰における行所の様相

—現地踏査の成果から—

岡寺 良

九州北～中部には、宝満山・彦山、六郷山、阿蘇など、中世から近世にかけて修験集団による峯入り（入峰）が盛んにおこなわれていた。九州西部の肥前国でも、肥前国牛尾山を中心に、筑前境に聳える背振山を胎蔵界の中心、肥前中部に高くそびえる多良岳を金剛界の中心とした、いわゆる「肥前国峰」が設定されていた。『肥前牛尾山峰中略縁起並地銘』によると、両界曼荼羅になぞらえ、法華經二十八品を表す 28ヶ所の行所と 180 の勤行所が設定され、それらの行所の内、牛尾山・背振山・高野嶽・金立山・天山・太良嶽・作礼山・而去山の 8つの峰を「華八軸」を表すとし、重要な行所が記される。28 の行所の順番をたどると、佐賀県小城市の牛尾山を起点に、天山、古湯、三瀬と北上して三瀬峠から背振山系の稜線を通り、背振山に至る。その後、南下し、佐賀平野の北側に接する峰を西へ、神埼の仁比山、菩提寺山（八天山）、金立山を経て、武雄の黒髪山へ至る。そして南下して、多良岳を経由、杵島山地周辺の峰を巡り、牛尾山の西に聳える而去山（両子山）を最後の行所として、牛尾山へ駆け出すというやや複雑なルートとなっている。

この肥前の国峰の全体像については、古く黒木俊弘の研究（黒木俊弘 1987「肥前牛尾山の修験道」『英彦山と九州の修験道』（山岳宗教史研究叢書 13 名著出版））によって明らかにされ、その後肥前修験道研究会の白濱信之によって、肥前修験組織の内部構造とともに、金剛界にあたる西部二十八箇所行所の現地踏査など、さらに詳細な内容が明らかにされている（白濱信之 1990『肥前修験道の研究』葦書房）。また、山本義孝によっても胎蔵界にあたる東側の行所のうち、そのいくつかについて現地踏査の成果が明らかにされている（山本義孝 2014「脊振山系と肥前霊山の諸相『山岳修験』第 54 号」）。発表者は背振山系、あるいは肥前多良岳の山岳信仰・霊場遺跡の現地調査の一環として、肥前国峰入峰の行所の内、主要なものについての現地踏査を行い、その様相を公表した（岡寺 2016「肥前の国峰入峰と行所の様相」『多良岳と山麓の霊場遺跡』（第 6 回九州山岳霊場遺跡研究会資料集））。本発表では、まずその発表成果について報告したい。さらに、筆者は近年、（1）ドローン撮影による遺跡からの景観の確認、（2）三次元計測ソフトを用いた遺跡の立体画像の作成などの新たな調査手法を山岳信仰・霊場遺跡に導入し、その有効性について検証を行っている（科学研究費（基盤研究（C））16K03180・研究代表：岡寺 良）。それらの手法を同地域にも応用した結果なども本発表にて紹介できればと考えている。

（おかでら・りょう 九州歴史資料館学芸員）

下野岩船山高勝寺真名縁起と檀那院胤海

林 京子

岩船山は栃木県の南西部に位置する岩山で山上には蓮華院高勝寺（天台宗）があり、彼岸は卒塔婆供養で賑わう。高勝寺の研究蓄積は少ないが「下野州岩船山縁起」（「真名縁起」）と「岩船地蔵菩薩縁起」全5巻（「仮名縁起絵巻」）が現存し詞章のみ翻刻されている。発表者は高勝寺縁起類のデジタル複本を作成し、翻刻を再校訂し解題して寺と公共図書館に施入しようと発願した。今回その過程で得られた知見を発表する。

根津美術館所蔵の「地蔵菩薩靈驗絵詞」（室町期）には、伯耆大山の僧が岩船山で下司法師の身体を割いて出現する生身の地蔵を拝する印象的な絵が描かれている。伯耆大山寺の縁起にも岩船山の説話がある。高名な地蔵霊場であった岩船山は天正12年（1584）大慈院等周辺の多くの寺社と共に戦火で焼失した。

守澄法親王は天海による日本宗教界の再編の一環として慶安元年に日光に入山し輪王寺宮となった。その際岩船山に参詣している事から、この頃岩船山が蓮華院高勝寺として寛永寺によって再興されたらしい。その総仕上げとして寛文10年（1670）に伯耆大山学頭兼檀那院胤海が「真名縁起」を作成し施入した。

胤海は「東叡山寛永寺慈眼大師縁起」「東叡山寛永寺元三大師縁起」の作者として知られる。2つの縁起は、元三大師を本尊とした天海の祈祷で家綱が誕生した挿話で融合している。これらが両大師信仰普及という目的から「わかりやすさ」を重視しているのに対し「真名縁起」はきわめて宗教的な文脈で書かれ、門跡や寛永寺の高僧・高位の貴族を読者に想定している。今回の再校訂で「真名縁起」が照高院宮道晃の筆で胤海の和歌の師の中院通茂が取次をしたこと、「真名縁起」は「東照社縁起」と同じく「延暦寺護国縁起」に基づき戦略的に作成された縁起であることが明らかになった。

従来岩船山は伯耆大山支配下にあったと考えられ、「真名縁起」も「古縁起の書写」とのみ考えられてきた。しかし胤海は家康と天海を引き合わせた施薬院宗伯の子で、天海の命で約40年間伯耆大山寺の学頭職を勤めた天海の高弟で寛永寺高僧である。彼は天海の嫡流を自負し、強靱な肉体と精神力で天海の構想の実現と神格化に奔走した傑僧であった。

今回の再校訂で「真名縁起」が照高院宮道晃の筆で胤海の和歌の師の中院通茂が取次をしたこと、「真名縁起」は「東照社縁起」と同じく「延暦寺護国縁起」に基づき戦略的に作成された縁起であることが明らかになった。本発表では、伯耆大山寺の復興に尽力した檀那院胤海と高勝寺真名縁起、岩船山信仰と家綱の生母宝樹院の交錯を、画像等を交えて考察する。

（はやし・きょうこ 高勝寺プロジェクト）

「伯耆大山略絵図」を読む

岩鼻 通明

伯耆大山の山岳信仰に関する調査研究は、縁起絵巻などについては、かなり詳細な研究が進められてきたが、古地図類を活用した歴史地理学的視点に立脚した調査研究は、ほとんどみられない。

本報告で紹介する「伯耆大山略絵図」は、堀田里席の写しであることが図中の左下にみえるが、江戸後期の作と推定されており（山下和正『地図で読む江戸時代』柏書房、1998 年）、近世の大山を描いた木版絵図としては第一級の資料であるといえよう。堀田里席は、奈良に存在した内山永久寺の境内図も 19 世紀初頭に描いていることから、ほぼ同時期の作かと思われる。

「伯耆大山略絵図」には、上半部に伯耆大山の山容と山麓の宗教集落が描かれ、下半部には日本海沿岸が描かれる。下部中央に弓ヶ浜が垂直に、下端部に島根半島が水平に細長く描かれており、まさに「国引き神話」を図示した表現となっている。

そして、左下端部には隠岐島の輪郭が描かれ、右下端部には松江城下町から宍道湖を隔ててワニブチ山までが描かれ、その山向こうに位置するはずの出雲大社は描かれていない。この絵図の下半部に描かれた地域は当然ながら伯耆大山の信仰圏に含まれるが、大山はもっと広範囲に信仰を広げていた。

大山寺の境内の表現は、寛政 9（1797）年の「大山寺古図」に描かれた十三堂塔三院谷四十三坊の景観をほぼ踏襲しているものとみられる。それよりも、むしろ絵図の左右と下半部に描かれた参詣道の描写に興味をひかれる。

大山へ通じる道は大別して、川床道・坊領道・尾高道・横手道の四本に分けられるとされるが、この絵図には、より多様な参詣道が描かれている。絵図の左上端には、大山からの道のりが記されており、米子・黒坂・御来屋・赤崎・溝口・八橋・江尾・三机・郷村・松江・広瀬・杵築といった周辺の町や村までの里程が示されている。

日本海には、沖合いを航行する西回り海運の北前船も描き込まれ、右上部に聳え立つ霊峰大山から中腹の宗教集落、そして裾野に広がる参詣道を通して信仰圏とつながる世界を描き出すことが、この絵図の作成目的であったと想定されよう。

（いわはな・みちあき 山形大学教授）

荒神神楽「大山能」について

中野 秋鹿

かつて牛馬守護の霊地としての大山信仰が篤かった中国地方の備後、備中、美作を中心に、大山を題材にした神楽能の演目が盛んに舞われていた。その内容は大山の^{だいぢみょう}大智明権現社の末社であり、牛馬の守護神とされる下山神社の縁起を描くものであった。

広島県庄原市東城町の比婆荒神神楽の「大山の能」では、備前国児島出身の修験者が大山へ修行に向かう途中で、紀州熊野の鈴木三郎と諍いになり無惨に殺され、憐れに思った大智明権現が、修験者の霊を下山権現として祀り諸国牛馬の守り神となす、という縁起が描かれる。「大山能」は下山神社の縁起を通して、修験者の各系統の遠祖を大山信仰と結びつけて広めるために生み出された演目であり、同様のあらすじで、下山明神の出自を美作国勝田郡の下山源五郎または備中国浅口郡江原荘の渡辺源吾照政とするものもある。

また、備後、備中、美作地域では江戸後期の文化・文政期に国学の影響を受けて、神楽から神仏習合的な要素を排除しようとする改革が興り、その影響を受けたと見られる大山能の台本も残されている。修験色の強い下山神社の縁起は語られず、鎌倉期の説話集『撰集抄』の大山寺縁起を、神道風に改変した内容となっている。^{としかた}年方という武士がある日多くの鹿を射て帰り、日頃信心している^{おおやまづみ}大山祇大神の御神体（『撰集抄』では地藏菩薩像）を拝すると、鹿を射た矢がすべて御神体に刺さっていたため、以後悔い改め殺生をやめて自宅を大山神社（『撰集抄』では仏堂）として崇敬し、切別明神と号して牛馬繁昌の守護をするという縁起が描かれる。

しかし「大山能」は、昭和期に入り農林業の現代化で労働用の牛馬の飼育が行われなくなったことで、牛馬守護の霊地としての大山信仰の衰退に伴い、舞われることが無くなっていった。その後、奥大山の麓にある鳥取県江府町で備中系の神楽を伝える^{さがりかや}下蚊屋荒神神楽明神社では、昭和期に新たに大山能が創作された。そこには牛馬守護の要素はなく、明治期の神仏分離によりかつての大智明権現社が大神山神社奥宮となり、その祭神とされた^{おおなむちのみこと}大己貴命を中心とする大山信仰が描かれている。

（なかの・あいか 中村元記念館東洋思想文化研究所研究員）

修験の竜樹菩薩信仰について —箕面の役行者伝承を中心に—

藪 元晶

拙稿「阿弥陀信仰者の竜樹菩薩信仰について—愛宕山と箕面の事例から—」（『御影史学論集』43号、2018年10月）では、10世紀中頃以降阿弥陀五尊の信仰が見られるようになり、その中で竜樹菩薩は阿弥陀五尊の一尊として極楽浄土へ導いてくれる菩薩として信仰されるようになったことから、以前より竜樹菩薩で有名であった箕面は阿弥陀信仰者がより多く集まる場所となったことを述べた。そのことを示しているのが、長久年間（1040年～1044年）成立の『大日本国法華経験記』巻中「第五十三横川の永慶法師」の話である。阿弥陀信仰者の永慶法師が横川から箕面にやってきて、夢の中で竜樹菩薩と出会ったという内容である。

ところが、時代が下って、元亨2年（1322）成立の『元亨釈書』の「役小角」では、次のように記されている。

小角嘗在_{ミノヲ}摂州箕面山。山有_レ滝。小角夢。入_二滝口_一。謁_二竜樹大士_一。覺後構_二伽藍_一。自_レ此号_二箕面寺_一。為_二竜樹淨利_一。

役行者はかつて箕面山にいたが、夢で滝口に入り、そこで竜樹菩薩に出会ったという。そして、夢が覚めた後に伽藍を構えて箕面寺と号し、竜樹菩薩の淨利としたということである。ここでは、役行者が竜樹菩薩に出会い箕面寺を開創したという話になっている。このことはすなわち、この時期の箕面では、修験者達によって彼らの始祖である役行者と箕面の竜樹菩薩が深く結びつけられて語られるようになっていたことを示している。つまり、修験による竜樹菩薩の信仰が成立していたものと考えられるのである。

そこで、本論では、箕面において阿弥陀信仰者の竜樹菩薩信仰が、どのような経緯で修験の竜樹菩薩信仰へと変化したのかを考えていきたい。

管見ではあるが、箕面における役行者の初見史料は、鎌倉時代の成立とされる『願文集』に記載されている治承3年（1179）の「箕面寺常行堂供養願文」である。その冒頭には「役優婆塞。酌修行之濫觴。徳善大王。爲鎮守之靈社。」と記されており、そして最後に「治承三年十月日 箕面寺大衆敬白」とある。このことの意味をさぐる中で、この問題を究明していきたい。

（やぶ・もとあき 御影史学研究会）

立山開山縁起の伝播

— 隠岐『高田大明神縁起』にみえる立山縁起 —

加藤 基樹

越中の霊山〈立山〉の「立山開山縁起」研究における諸問題のなかには、立山山麓の宗教集落（芦峯寺・岩峯寺）の縁起系統に属さない縁起分析や、立山縁起の諸国霊山縁起との交渉や伝播の問題もあげられる。本報告では、隠岐高田神社（島根県隠岐郡隠岐島町都万中里）に伝わる『高田大明神縁起』（丹表紙本・下巻、嘉慶2年（1388）成立）に取り込まれた「立山開山縁起」（「在能、有頼、求熊獸血塗、聖容顕岩室而、示金身」〔本文9紙目〕、「此内、有能、有頼、熊獸血塗尋云コトアリ。是レハ越中国立山権現御出世由来ト聞」〔裏書31紙〕の記述）を取り上げ、まず、その内容、成立時期、取り込まれた要因や伝播経路などについて整理する。同神社には、このほかに、同名の紺表紙本『高田大明神縁起』（上下二巻）、そして越中国とのかかわり深い桃井詮信の詠草三種を載せる『百首和歌』（至徳年間成立）が伝わっている。

奥書によれば、『高田大明神縁起』は、真言僧の法印頼尊と時衆の沙弥其阿弥陀仏が、嘉慶2年（1388）2月3日に奉納し、後にこれを楽蓮社信譽が慶長4年（1599）9月13日に書写し、これを用いて隠岐国内を勧進・弘通し、元和元年（1615）10月、高田神社へ再び奉納したものであるという。そもそも立山開山縁起が取り込まれた時期は、当初か書写段階かはっきりしていない。

この縁起本文該当箇所「在能」と「有頼」二人の名がある。「在能（有能）」は立山縁起にみえる「有若」の訛伝・誤記なのか。本文の立山縁起にさらに信譽が裏書したのは、書写した慶長年間に至っては、本文のこの文言が立山縁起のモチーフであることが忘れられて、改めて情報を得て付記したものと考えられる。他方、「在能（有能）」の名がみえることについては、『佐伯家先祖暦代記』（富山県射水市個人蔵）に第32代「有能」（元亀2年〔1571〕没、86歳）が見え、信譽の書写から遠くない時期に越中に実在した人物の関わりがあった可能性も否定できず、「立山開山縁起」は、信譽の書写段階に足されたものである可能性もある。

なぜ隠岐国高田神社に、縁起内容の親縁性が語られる大山縁起ではなく立山開山縁起が引用されたのか。「立山開山縁起」研究における視点などにも言及したい。

（かとう・もとき 富山県〔立山博物館〕）

近世秋葉信仰の展開 —『榧寺縁起』を中心として—

武井 慎悟

本発表では、近世秋葉信仰の展開と秋葉権現のイメージ変化について検討する。具体的には、台東区の浄土宗寺院、榧寺に伝わる「榧寺縁起」諸本の内容を比較検討することで、江戸を中心とした浄土宗への秋葉信仰の展開とその背景について考察する。それと合わせて、「榧寺縁起」と類似した伝承を手がかりに、秋葉権現のイメージ変化にも考察を加え、従来の秋葉信仰研究をより深く掘り下げることを目指したい。

秋葉信仰は近世期を通じて全国的に広がった。しかしながら、信仰の大元である秋葉山が位置する遠州以外での秋葉信仰の展開についての研究は、現在、しっかりとなされているとはいえない状況にある。こういった研究の多くは、従来、秋葉信仰と濃密な関係が指摘されている信州や東海地方を中心に据えたものであり、それ以外の諸地域の研究、特に関東に焦点を当てた研究は殆ど手付かずであるといつてよい。上記のような現状の背景には、史料的な制約が大きいことが挙げられるが、関東においては『新編武蔵国風土記稿』『新編相模国風土記稿』『御府内寺社備考』等を用いることで、ほぼ同時代の秋葉権現を祀る場所の分布を比較的広範囲に検討することが可能である。

そこで本発表では、近世後期の武蔵国・相模国・江戸の秋葉信仰に焦点を当て、以下のように論述を進めていく予定である。まず、はじめに『新編武蔵国風土記稿』『新編相模国風土記稿』『御府内寺社備考』等を用いて、近世後期の武蔵国・相模国・江戸の府内における秋葉権現を祀る寺社を概観し、どのような特徴がみられるか検討する。そこを通して、近世江戸にみられる特徴的な浄土宗内での秋葉信仰について指摘する。次に、浄土宗内の秋葉信仰について大きな手がかりとなる、榧寺に伝わる「榧寺縁起」について概略を示す。続いて「榧寺縁起」を分析することで、以下の二点を考察する。一点目は浄土宗内の秋葉信仰の特徴について考察する。もう一点は、「榧寺縁起」にみえる秋葉権現のイメージ変化、具体的には、秋葉権現の捉え方が僧形から一般的な烏天狗形へと変化があったことを指摘し、その分析を通して、近世秋葉信仰の展開について、より広域的な考察を行いたい。最後は、これまでの分析を通して得られた知見を整理し、近世秋葉信仰の展開についての研究の射程と可能性を広げてみたい。

(たけい・しんご 駒澤大学大学院)

鳥取からの小豆島巡拝 ―大山北麓地域を中心に―

小林 奈央子

小豆島霊場は「本四国」霊場（四国八十八ヶ所霊場）に対して「新四国」あるいは本四国をまねた「写し霊場」とも呼ばれ、全行程が約 150 キロ、88 ヶ所と奥の院・番外を含めた 94 ヶ所が公認霊場となっている。歩き遍路では 1 週間程度、車による巡拝ならば 4 日程度ですべてを巡ることが出来る。

最新の調査によれば、小豆島八十八ヶ所霊場の巡拝が盛んになったのは、天保年間と考えられ、県外など遠隔地から多くの巡拝者があったことが明らかになっている（佐々木 2017）。また、大正 2 年（1913）には、小豆島巡拝の宣伝や団体参拝者の募集、霊場信徒の教化などを目的とした「小豆島霊場会」が全国に先がけて設立され、昭和に入ると独自の先達制度を創始した。戦後は、寄進者（団参者）の住所などを見ると、兵庫県と鳥取県からの団体巡拝者が多く、とりわけ鳥取県からの巡拝の多さが際立っている。巡拝団の先達の出身地を調べた先行研究においても、兵庫・鳥取両県の出身者が全体の約 8 割を占め、鳥取県の出身者が兵庫県よりわずかに多いことが報告されている（小田 1984）。

鳥取県からの巡拝者が多い理由について、明治期に巡拝者が多かった香川県、兵庫県南部、岡山県、広島県から、その後新たに鳥取県や兵庫県北部（但馬）へ信仰圏が拡大した可能性を指摘する研究（小田 1984）や、鳥取県、兵庫県北部（但馬）以外に、福井県からの巡拝者も比較的多いことから、豪雪地帯である日本海側の地域から、温暖な小豆島を好んで農閑期に来ていたのではないかという霊場側の語りもあるが、いずれもはっきりしていない。ただ、小豆島霊場と鳥取県の双方で調査をおこなったところ、地理や気候の問題というよりは、巡拝団を率いる主管者や先達の力、すなわち〈人〉に大きく拠っていることが指摘できる。

本発表では、古くから大師講の行事として小豆島巡拝が盛んであった鳥取県大山北麓地域の小豆島巡拝団、なかでも小豆島霊場巡拝 500 回を達成した種子みつ子特任大先達が長らく率いていた「東伯一心会」の活動に着目し、鳥取県からの小豆島巡拝が盛んであった理由の一端およびその活動が戦後の小豆島霊場の繁栄を支えていた実態について明らかにしたい。

小田匡保 1984 「小豆島における写し霊場の成立」『人文地理』36(4), 59-73

佐々木卓也 2017 「小豆島霊場調査報告」『ミュージアム調査研究報告』(8), 9-44

（こばやし・なおこ 愛知学院大学准教授）

霊場恐山における参道空間の変容

大道 晴香

青森県の下北半島にある霊場恐山は、死者供養・現世祈祷・湯治の三要素を内在させた、仏教と民俗宗教との共生によって成立してきた聖地である。死者の霊が集まる「オヤマ」として当地を信仰してきた下北地方においては、集落の高齢女性を主体した地蔵講を中心に、「オヤママイリ」と称して恐山への参詣が行われてきた。また、諸国海商らの信仰を集めた当地は、近世末期には既に全国から参詣者を集めていたとされる。

近世由来の参詣者たちは、山麓からカルデラの中心にある霊場へ続く参道を、自らの足を頼りに登っていた。参道には「大湊三十三観音」のような石仏が配され、加えて、「一杯飲めば十年若くなる」という清水の湧く「冷水」、罪深い者には鬼のように見えるという「鬼石」など、複数の“要所”が存在しており、徒歩による参詣者たちは、路傍の石仏に賽銭と供物を手向けながら、メルクマールとなる要所との関わりを通じて霊場を目指した。これらの要所に、ゴールである霊場との関係において宗教的な「境界」の価値が見出されていた点に鑑みれば、参道は目的地に至る単なる通路ではなく、聖域の外縁を成す境界的な空間であったと考えられる。こうした聖域の一部としての参道空間に大きな変化をもたらしたのが、自動車という移動手段の登場である。

恐山の参道で自動車による旅客輸送が開始されたのは1921年（大正10）のことで、田名部の街と霊場間での自動車運行によって、徒歩で3時間を要した道程は1時間ほどに短縮され、1960年代には既に徒歩での参詣は少数となっていた。移動に係る労力や時間の削減もさることながら、自動車輸送の導入で最も注目されるのは、人と世界との関わり方の変化に伴う参道空間の構造と性質の変容であろう。その原動力になったと推察されるのが、「観る／観られる」という観光的なまなざしである。

自動車は、徒歩時代の参道の要所を車窓の「風景」へと転換した。この現象は、ともすれば参道の“通路化”、すなわち、聖域を構成していた実践の後退という意味で参道空間の解体と捉えられかねないわけだが、ここには、「観る」もしくは「見える」という視覚的な基軸に依拠した、参道空間の再編が生じていたものとみられる。本発表では、（1）むつ商工会議所女性会による「恐山街道観音・地蔵尊衣替えと清掃奉仕事業」、（2）下北交通バス「恐山線」の運行状況を例に、自動車輸送の普及に伴う聖地構造の変化について考えたい。

（おおみち・はるか 國學院大學）

中世修験道の地域的な展開を巡って —戸隠山の事例—

Caleb Carter

本発表の目的は、中世において修験道がどのように普及し、地域の山寺に到着し展開してきたのかを分析することにある。その中で、戸隠山（信濃国）の事例を挙げる。先行研究によれば、戸隠修験道は、早くとも 11 世紀から始まったとされる。その後、中世に栄え、江戸時代初期に天台宗に支配されたことで衰退していったと結論づけられている。以上に対して筆者は、修験道の宗派としての特徴、すなわち、集団認識・語彙・創立者・儀式などの指標のもとに考察を進める。このようなアプローチにより、本発表では、修験道が 1520 年代に英彦山の阿吸房即傳からの峯中灌頂や、彼が編集した修験道の切紙によって戸隠修験道が始まり、近世に渡って展開されていったと指摘したい。

まず、当時の文書を分析しながら、15～16 世紀の戸隠山における修験道の形成に注目する。そこで『戸隠山顕光寺流記』（1458 年）という戸隠山の重要な中世の縁起を挙げ、峯中修行や修験道の有様を検討する。次に、即傳が編集した『三峯相承法則密記』（1521～28 年頃）と、戸隠で書かれた『修験問答』（1561 年？）とを比較する。『修験問答』は『法則密記』から語彙・概念・儀式などを利用しており、大きな影響を受けたと考えられる。この影響が戸隠での修験道の始まりではないかと筆者は推測する。中でも特にその二資料の入峰についての節に注目する。これにより、英彦山の三峯修行の構造が即傳によって戸隠山に入った事が明らかとなる。以上の基盤の上に、戸隠修験道のアイデンティティ・思想・儀式などが現れるようになると筆者は考える。以上のアプローチを採用することで、修験道の地域的展開がよりよく可視化されることを指摘したい。

（カーター・ケイレブ 九州大学）

山林・山岳・山の寺—遺構論の立場から見た 用語定義について

藤岡 英礼

近年、全国的に山岳仏教遺跡の調査が増加し注目を集めているが、類似した事象であるにも関わらず、「山岳寺院」「山林寺院」「山寺」「山の寺」の用語か、用法も定義も曖昧なまま汎用され、混乱している実情がある。

報告者は、混乱の原因が「山林寺院」など修験道への展開を意識した浄処観と遺構の立地を直結した事にあると捉えている。中国の動態や日本の律令制度上からも、俗界との接点にあり、それとの交渉を前提とする「山寺」と、浄処である「禪定」の場の機能分化を重視し、両者の一体的把握に懐疑的な立場をとる。

両者を機能分化させたのは、山岳仏教遺跡の中世への変容を見据えた動きにも連なるが、報告者はこれまで、山寺の内部構造の分析に主軸を置いていたため、禪定の場の変容を視野に入れていない問題があった。

ただ、実際の山上部での寺院展開は、10世紀に至るまで山地での平坦面の造成技術が未熟で、立地が限定されたこともあって、文殊山（福井県）のように奥行きがない山や、流麿寺（福島県）のように、平野に接した狭隘な山上に堂舎が散開する事例も多く、山寺と禪定が未分化な側面がある。

9世紀代は、国家ですら尊像を安置し修法を要請する際に、山寺ではなく山中の道場や仁祠を選ぶことがあり、山上に諸堂が分散しやすく、清僧を養成する修行場と接近する状況にあったと思われる。山上の遺構の多くは10世代前半までに廃絶し、この前後が一つの画期に設定できるが、10世紀への移行に際し、裏行場一廻峯行への発展コースと、醍醐寺（京都府）や己高山観音寺（滋賀県）のように行場を包括しつつ山上伽藍化するコースに分岐すると思われ、禪定の場の発展観を踏まえて用語を規定すべきと考える。

一方山寺は、9～10世紀に年分度者の獲得や定額寺化を通じて、諸堂舎の解体と集約を進め地域の中核を狙うと思われるが、この際に、山上伽藍との関係が問題となる。

例えば山上伽藍の拡大が山寺につながるのか。己高山の山上伽藍は、中世に勢力を拡大する中腹・山麓寺院が一揆的に支える、宗教的根拠を保証する象徴に甘んじてしまう。山寺と禪定の場は、総体として対外的な一体感は演出されたが、それぞれの論理で、寺院の権益を保護・主張する装置として実利的な社会的枠組みの拡大を重視し、寺院勢力を形成していった。果たして10世紀段階での山寺はどちらを指すのか。里山寺院についても触れながら、信仰よりも寺院勢力の形成という観点から遺構をながめ、用語問題を考えたい。

（ふじおか・ひでのり 栗東市教育委員会）

豪圓の寺院再興と近世大山寺の成立

山本 隆一郎

伯耆国西部において最も有名な僧侶の一人が、淀江（現米子市）出身で大山寺の中興で知られる豪圓（圓智と名乗る時期が長いがここでは豪圓で統一する）である。豪圓は伝説的な法力に関する逸話が地元にも多数伝わっており、豪円山という山の名前にもなり現在でも地域の人々に親しまれている。

豪圓の果たした歴史的な役割については、大山寺に関する諸史料や『大山町誌』をはじめとする自治体史、沼田頼輔氏『大山雑考』などによってその概要を知ることが出来る。また、安達一彪氏・佐々木一雄氏らは新たな豪圓関係資料を発掘、その事績を実証的に明らかにした（県政新聞「古文書雑記 英僧豪円僧正（一）～（五）」など）。一方で、豪圓の経歴や大山寺中興の具体相についてはまだまだ不明な点が多い。

本発表では、岡山県の天台宗の古刹・金山寺の所蔵する豪圓関係資料から、豪圓と戦国大名宇喜多氏の関係や、荒廃した寺社の再興活動に携わる豪圓の動向を明らかにする。次に、豪圓が天台宗内において強力な影響力をもつきっかけになった、比叡山延暦寺再興勧進についても分析を加える。豪圓は正親町天皇や門跡らの指示の下で、全国の諸大名との交渉を行ったことを明らかにする。

また、山陰を支配した毛利氏・吉川氏と豪圓の関係についても究明する。特に豪圓の西院楽院主就任の時期や、大山寺内機構の変化についても論じる。豪圓は吉川氏と緊密な関係を結び、その領国内に近世寺院としての大山寺を創出したといえる。関ヶ原の合戦後、吉川氏・宇喜多氏が改易されたことにより、豪圓は大山寺の経済権益の保全に尽力する。特に、「下家文書」や京都三千院円融藏に所蔵されている豪圓の書状によって、現在も写が大山寺に残されている徳川家康（カ）朱印状の交付課程を明らかにしたい。くわえて、豪圓の最晩年に朱印状を大山寺に直接交付するため大山寺・金山寺に下向したことを指摘し、松江城の棟札に残る慶長16年（1611）正月付の大山寺の祈祷に豪圓関わった可能性についても言及する。

以上の分析から、豪圓が大山寺を中興する前提として、金山寺・延暦寺などの数多くの寺社の再興を行い、天台宗の中で重要な位置を占めていたことを指摘する。また、宇喜多氏や吉川氏などの大名の政策にも関与した豪圓の政治交渉は、江戸幕府が大寺院の寺領を大幅に削減する政策から大山寺領を保護し、近世以降の大山寺の隆盛に寄与したことを明らかにしたい。

（やまもと・りゅういちろう 鳥取県立博物館学芸員）

比叡山における豪圓の活躍—曼殊院文書の紹介—

中川 仁喜

豪圓（圓智とも、豪圓で統一、1536～1611）は戦国期から近世初期にかけて活躍した学僧である。その一方で、豪圓は、羽柴秀吉による備中高松城攻めに際して雨を降らせたり、伯耆国米子藩主中村一忠が大山寺の寺領を削減したため呪法により一忠を若くして死に至らしめたという祈禱僧としての伝説も地元には伝わっている。豪圓に関わる研究は管見の限り多くないが、沼田頼輔『大山雑考』（稲葉書房、1961）等を取りあげられると共に、『大いなる神仏の山 大山』（鳥取県立博物館、2018）において、関連資料とともに報告がなされている。特に後者では山本隆一朗氏が「お寺の再建請負人」と位置づけて詳細に紹介している。それによると豪圓は伯耆国汗入郡の生まれで大山寺において僧侶となり、備前国金山寺を宇喜多家を檀越とすることで再建する。その後、元亀2年（1571）に信長の焼き討ちによって灰燼に帰した比叡山延暦寺の諸堂再興にも尽力している。備前国西大寺にも助力し、大山寺の西楽院主を兼帯するとともに、江戸幕府から金山寺、大山寺の寺領安堵の朱印状を発給された。豪圓は金山寺に下向した後、同寺遍照院において慶長16年（1611）入滅している。豪圓の研究は緒についたばかりであり、地域史のみならず戦国大名論、仏教史（特に中近世天台宗史）等、多角的な考察が加えられるべき存在であろう。

本報告では、「曼殊院文書」に見られる豪圓自筆の書状を紹介し、豪圓の比叡山再興に関わる活動を分析する。ここからは、同時期に比叡山再興に尽力した正覚院豪盛との関係や、再興を果たした後の比叡山内部での混乱、豪圓が比叡山を離れて大山寺に戻った理由など、新たな豪圓の人物像が明らかとなる。在地領主との関係も語られており、地域史の史料としても重要である。比叡山再興の新側面が明らかになるとともに、戦国・織豊期の混乱期を経て、江戸幕府のもとで天台宗が本山、末寺ともに統制されていく姿を豪圓を通じて見ることができる。

（なかがわ・じんき 大正大学准教授）

本山派の霞状—上野国の事例紹介—

時枝 務

霞状は、霞を安堵するために発給された文書で、本山派に特有なものである。すでに森毅氏らによる研究があるが、取り上げられた地域の偏りもあって、その実態はかならずしも十分に解明されておらず、研究の余地を残している。本発表では、上野国の事例を紹介し、基本的な検討をおこないたいと思う。

とはいえ、現在確認されている上野国の霞状は、わずか6通に留まる。最古のものは、宝永4年（1707）8月28日に勢多郡荻原村満蔵院あて発給されたもので、17世紀に遡るものは未発見である。最新のものは、嘉永2年（1849）3月に山田郡浅部村清雲寺・同郡浅原村持宝院あて発給されたもので、幕末まで霞状の発行がおこなわれていたことが確認できる。

6通の霞状は、差出人が住心院候人である5通と、聖護院坊官である1通に大別される。住心院候人の5通は、文言に「御本寺宮」云々が含まれる4通と、「先規之由緒」云々とある1通に細分される。聖護院坊官の1通は、文言に「支配不可有子細」云々とあって、住心院候人のものとはまったく異なった様式をみせている。

住心院候人が発給した霞状が多いのは、上野国が住心院の霞とされていたためで、住心院が年行事・准年行事に霞村の管理を委ねる形式で霞状が作成されているとみることができる。それにも拘わらず、聖護院坊官のものが存在するのは、聖護院直院から年行事へ昇格した修験道寺院があったからであるが、この場合住心院よりも聖護院の立場が重んじられたことを意味する。

そのほか、わずかな事例ではあるが、発表では、詳細な検討によって、霞状をめぐる基本的な論点を提示したい。

（ときえだ・つとむ 立正大学教授）

第 39 回日本山岳修験学会 大山学術大会

大会要領

主催 日本山岳修験学会・同第 39 回大山学術大会実行委員会

後援 大山町教育委員会・三朝町教育委員会・鳥取県教育委員会
公益財団法人 とっとりコンベンションビューロー

協力 大神山神社（奥宮）・角磐山大山寺・一般社団法人 大山観光局
米子市教育委員会

【日程】 平成 30 年（2018）10 月 20 日（土）～22 日（月）

1 日目（午後）開会式・公開講座

2 日目 研究発表会・総会・懇親会

3 日目 巡見（見学会） A・B・C の 3 コース

【会場】 ホテル大山（本館）会議室（鳥取県西伯郡大山町大山 36－2）

第 1 日目：10 月 20 日（土）13 時 30 分開始（13 時から開場、受付開始） 会場：ホテル大山（本館）会議室

◆ 開会式（13 時 30 分から）

挨拶（日本山岳修験学会長、大会実行委員長、来賓）

◆ 公開講座

（1）基調講演（13 時 50 分～14 時 50 分）

テーマ：『大山寺縁起』の語るもの

講 師：長谷部八朗＜日本山岳修験学会副会長・駒澤大学学長＞

（2）調査報告（15 時～16 時）

テーマ 1：国指定史跡「大山寺旧境内」から見えてきたこと

講 師：西尾秀道＜大山町教育委員会事務局 社会教育課長＞

テーマ 2：三徳山調査 10 年のあゆみ

講 師：柚垣大作＜三朝町教育委員会事務局 社会教育課副主幹＞

（3）講演 2（16 時 10 分～17 時 20 分）

テーマ：「霊場・大山寺を考える」

講 師：山本義孝＜日本山岳修験学会理事・静岡県袋井市歴史文化館長＞

司 会：福代宏＜大会実行委員会事務局・鳥取県立博物館学芸員＞

コメント：鈴木正崇＜日本山岳修験学会会長・慶應義塾大学名誉教授＞

大館宏雄＜大山寺圓流院住職＞

◇ 第 39 回大会実行委員会・日本山岳修験学会役員合同会議及び日本山岳修験学会役員会
（時刻：17 時 45 分～19 時、会場：ホテル大山しろがね大広間）

第2日目：10月21日（日）9時30分から 会場：ホテル大山（本館）会議室

◆ 研究発表（会場：ホテル大山会議室）※1人当たり約17分、質疑応答3分×17人

研究者発表順

	開始	終了	氏名	所属	題目
1	9:30	9:50	池上 正治		徐福と役行者および道教と修験道の関係について
2	9:50	10:10	城川 隆生		相模の一山寺院と『風土記稿』地誌調書上 —大山寺と光勝寺—
3	10:10	10:30	由谷 裕哉	小松短期大学	近世都市部の神社と修験考・事始
	休憩	10分			
4	10:40	11:00	岡寺 良	九州歴史資料館	肥前国峰入峰における行所の様相 —現地踏査の成果から—
5	11:00	11:20	林 京子	高勝寺プロジェクト	下野岩船山高勝寺真名縁起と檀那院胤海
6	11:20	11:40	岩鼻 通明	山形大学	「伯州大山略絵図」を読む
7	11:40	12:00	中野 秋鹿	中村元記念館	荒神神楽「大山能」について
	休憩	50分			
8	12:50	13:10	簗 元晶	御影史学研究会	修験の竜樹菩薩信仰について —箕面の役行者伝承を中心に—
9	13:10	13:30	加藤 基樹	富山県〔立山博物館〕	立山開山縁起の伝播 —隠岐『高田大明神縁起』にみえる立山縁起—
10	13:30	13:50	武井 慎悟	駒澤大学	近世秋葉信仰の展開 —『榎寺縁起』を中心として—
11	13:50	14:10	小林 奈央子	愛知学院大学	鳥取からの小豆島巡拝 —大山北麓地域を中心に—
12	14:10	14:30	大道 晴香	國學院大學	霊場恐山における参道空間の変容
	休憩	10分			
13	14:40	15:00	カーター ・ケイレブ	九州大学	中世修験道の地域的な展開を巡って —戸隠山の事例—
14	15:00	15:20	藤岡 英礼	栗東市教育委員会	山林・山岳・山の寺 —遺構論の立場から見た用語定義について—
15	15:20	15:40	山本 隆一朗	鳥取県立博物館	豪圓の寺院再興と近世大山寺の成立
16	15:40	16:00	中川 仁喜	大正大学	比叡山における豪圓の活躍 —曼殊院文書の紹介—
17	16:00	16:20	時枝 務	立正大学	本山派の霞状 —上野国の事例紹介—

◆ 総 会 16時30分（会場：ホテル大山 本館 会議室）

◆ 懇 親 会 18時から21時（会場：ビア ホフ ガンバリウス）

第3日目：10月22日（月）午前8時30分から

◆ 見学会

Aコース＜大山寺僧坊踏査＞

8:30 大山寺本堂集合、寂静山～中門院谷・南光院谷～大神山神社奥宮～金門（弁当）～釈迦堂跡～西明院谷～阿弥陀堂～圓流院（14:00 終了予定）

※行程のほとんどが山道なので、歩きやすい服装や靴、レインウェア持参で参加のこと。

Bコース＜大山寺境内散策＞

9:30 大山自然歴史館集合、大山寺本堂～大神山神社奥宮～金門～豪圓湯院（昼食）～阿弥陀堂～圓流院（14:00 終了予定）

Cコース＜米子市内散策＞

9:30 米子駅集合、国史跡米子城跡、山陰歴史館、加茂川、（昼食）本通り、法勝寺電車など（14:00 終了予定）

**第 39 回日本山岳修験学会大山学術大会
公開講座・研究発表要旨集**

編 集：大山学術大会実行委員会

発 行：平成 30 年 10 月 20 日

印 刷：有限会社 米子プリント社



印台
施贊
虎

地藏菩薩像（嗒然作、圓流院藏）